2018 ぎふ平和のつどい　第1回練習日6月10日

群読テキスト『チロヌップのきつね』のお話

『チロヌップのきつね』は児童文学者、高橋宏幸さんが１９７２年に発表した作品で、１９８７年には角川が映画化しています。このたび、出版元の「金の星社」、原作者のご厚意で、画像も含めて群読のテキストとしての使用許可をいただきました。

チロヌップはきつねがたくさん生息する島。春になるときつねざくらの白い花が一面に咲きます。春と夏だけチロヌップに移り住む老夫婦が迷子の子ぎつねを保護し、首に赤いリボンを巻いてやって可愛がります。

夫婦が島を出る秋になり、子ぎつねは家族の元に帰りました。きつねの家族が穏やかな毎日を過ごしていたある日、空気を引き裂く銃声が！

父さんぎつねと兄さんぎつねは撃たれて死んでしまいました。子ぎつねは逃げる途中に罠にかかって動けなくなります。母さんぎつねは傷を負いながらも子ぎつねのために食べ物を運び続けましたが、とうとう・・。寄り添う二匹の上に白い雪が降り積もっていきます。

戦争が激しくなったために老夫婦はチロヌップを訪れることができません。ようやく島にやって来た老夫婦が見たものは、丘を覆うきつねざくら。しらかば林の近くには、きつねざくらの大きなかたまりと小さなかたまりが並んでいました。そして、小さなかたまりのそばには錆びた鎖と、ぽつんと咲く赤いリボンのような花が一輪。

この作品のきつねたちをとおして、深く大きなものを伝えられる群読にしたいと願っています。

浅井彰子（「群読」構成・演出 担当）